

# 宮沢賢治と隠し念仏

門 屋 光 昭

## はじめに

宮沢賢治の遺言は、「国訳妙法蓮華経」を千部印刷し知己友人に配布することだった。

私の全生涯の仕事は此の経をあなたの御手許に届け、そして其の中にある仏意に触れてあなたが無上道に入られん事をお願いするの外ありません。<sup>1)</sup>

実に感動的な言葉である。賢治はその激烈な38年の生涯を法華経への篤い信仰告白で閉じた。

浄土真宗の篤信者の家庭に育ち、3歳の頃、親鸞の「正信偈」、蓮如の「白骨の御文章」を暗唱していたといわれる賢治も、盛岡中学校卒業後、出会った島地大等編『漢和対照妙法蓮華経』を読んで異常な感動を受け、盛岡高等農林学校を卒業する前後から、父親の浄土真宗を激しく批判し、法華経に傾斜していった。やがて、大正8年、妹トシの看病のために上京した際に、日蓮正宗の行動団体・国柱会の田中智学の講演を聞き、翌年入会、法華行者としての賢治が生まれた。賢治24歳の10月とも11月ともいわれる。その12月の夜中、花巻町内を太鼓をたたき題目を唱えながら歩きまわる賢治の姿が目撃されたそうだ。そうして、昭和8年9月21日の臨終間際、賢治が寝ている2階から、「南無妙法蓮華経」と高々と唱える題目の声が突然聞こえてき、枕元に集まった父親らに先の遺言が託された。

賢治の生涯が熱烈な法華経信仰で貫かれていたことは疑い得ないと思う。

しかし、一般的に人は一つの信仰で生涯を貫くほど魂が健やかではないし強くもない<sup>2)</sup>。まして、多神教世界で育った日本人ならば、「あれかこれか」と迫り、ただ一つだけを選択する一神教的信仰は持ちにくく、「あれもこれも」と信

仰しがちである。賢治にとっての法華経は一神教的信仰であり、これに対して、賢治を取りまく農民たちは多神教的な世界に生きていた。隠し念仏や庚申信仰・山岳信仰など雑多な庶民信仰の中で育ち、曹洞宗や浄土真宗などの既成宗教と共存しあって生きていたのである。

だから、この孤高の法華行者の周辺にうごめいている隠し念仏などの庶民信仰について語らないわけにはいかない。賢治の羅須地人協会失敗などの悲劇は、庶民信仰との葛藤という側面から見直す必要があると思うからである。また、賢治の法華経信仰を考えると、父親・政次郎の浄土真宗との信仰的対立が重視されるが、その浄土真宗は在家仏教的な色彩が濃く、同一線上に花巻周辺の隠し念仏があったと思えるからである。

筆者は、迫り来る死の床で賢治が行った口語詩の文語詩化の意味を考えながら、そこに影のように寄り添ううごめいている庶民信仰を探ってみたいと考えている。また、昭和6年9月、東京で発熱した直後、ないしは花巻に帰ってから間もなく病床で書き綴った「雨ニモマケズ手帳」の中に、そうした信仰が顔を覗かせていると思っている<sup>3)</sup>。したがって、主テーマは賢治と庶民信仰の関係を検証することにあるが、本稿では紙面の関係もあり、隠し念仏に限って扱ってみたい。

なお、宮沢賢治と隠し念仏を本格的なテーマとした先行研究はないが、断片的に扱ったものでも、(1) 森荘巳池著『宮沢賢治の肖像』(十字屋書店、1948年)の「隠し念仏との小さな闘い」の項、(2) 飛田三郎稿「肥料設計と羅須地人協会」(『宮沢賢治研究II』筑摩書房、1969)、(3) 内田朝雄著『私の宮沢賢治』(農山漁村文化協会、1981年)の「回帰と挑戦」の項などがある程度に過ぎない。

## 1. 秘事念仏の大師匠

宮沢賢治の「文語詩稿五十編」に無題「[秘事念仏の大師匠]」の[二](以下、「秘事念仏の大師匠[二]」と表記)という文語詩がある。

秘事念仏の大師匠、元信斎は妻子もて、北上ぎしの南風、けふぞ陸穂を播きつくる。

雲紫に日は熟れて、青みそめし野いばらや、川は川とてひたすらに、八功德水ながしけり。

たまたまその子口あきて、楊の梢に見とるれば、元信斎は歯軋りて、石を発止と投げつくる。

蒼蠅ひかりめぐらかし、練肥(ダラ)を捧げてその妻は、たゞ恩人ぞ導師ぞと、おのが夫をば拝むなり。<sup>4)</sup>

難解ではないのだが、かなり複雑な詩である。見方によれば揶揄的だし屈折もしている。賢治が何を言おうとしたのか、もう一つ伝わってこない。ただ、岩手県地方で「御内法」と称する在家仏教で、これを異端とする浄土真宗側からは「秘事法門」「邪義」と指弾され、研究者からは「隠し念仏」と呼ばれた信仰の指導者とその凡庸な妻子の日常をテーマにしたことだけは理解できる。

花巻女学校の音楽教師で賢治と深い親交のあった藤原嘉藤治は、十字屋版『宮沢賢治全集』で語注して、次のように述べている。

秘事念仏 隠念仏のこと。秘密裡に特殊の形式で念仏を行ふ民間宗教の一種。現在は東北地方殊に岩手県水沢付近を中心として盛んに行はれてゐる。花巻付近の太田村には現在二人の知識様があて、みな農家の隠居格の老人であるが各二人づつのオワキサマを従へて三人一組である。曾て「犬切支丹」と貶され、また蔵の中など秘密の場所を選んで集合するため、お庫念仏、庫法門、土蔵秘事などと呼ばれ、信徒はお庫門徒、秘事党などと呼ばれ、自らは在家念仏流と称し、所行も集合も同行以外には厳秘としてゐる。多くの派があり、阿弥陀又は聖徳太子、親鸞等の絵像や木像を拝するものとがある。寺院、僧侶を否定する思想を蔵してゐる。大概幼童を暗室に入れ永く念仏をととなへさせ、次にタスケタマへを連呼させて「お撰上げ」の行事を行ひ、救われたものは生身のまゝ極楽に詣つたものとする。その日をその人の終生忌日とする。<sup>5)</sup>

これは「秘事念仏」の要領良い解説である。これによって花巻郊外の太田村(現在の花巻市太田)の当時の状況が多少とも分かる。聖徳太子の絵像や木像を拝するのは「参りの仏(十月仏)」と呼ばれる別な信仰である<sup>6)</sup>などの、若干の誤謬があるものの、比較的よくまとまっている。だから、以後の宮沢賢治の研究家は、「秘事念仏」と言えば、この解説文を用いているほどである。

しかし、この解説では賢治の「秘事念仏」に対する思いは伝わってこない。そこで今少し、賢治が「秘事念仏」をどう取り扱っているのか見ておきたい。次は口語詩「憎むべき『隈』弁当を食ふ」(「春と修羅 詩稿補遺」)である。

きらきら光る川に臨んで  
ひとりで弁当を食ってゐるのは  
まさしくあいつ「隈」である  
およそあすこの廃屋に  
おれがひとりで移ってから  
林の中から幽霊が出ると云ったり  
毎晩女が来ると云ったり  
あの憎むべき「隈」である  
ところがやつは今日はすっかり負けてあて  
第一 草に腰掛けて  
一生けん命食ってゐるとき  
まだ一べんも復讐されない  
敵にうしろを通られること  
第二にいつも向ふの強味  
こっちの邪魔たる群集心理が今日はない  
青天の下まさしく一人と一人のこと  
第三 やつはもういゝ加減腹いせをして  
憎悪の念が希薄である  
そこでこっちもかあいさうなので  
避けてやらうと思ふけれども  
するとこんどはおれが逃げたと向ふが思ふ  
こゝにおいてかおれはどうにも  
今日は勝つより仕方ない  
川がきらきら光ってあて  
下流では舟も鳴ってあて  
熊は小さな卓のかたち  
松の横ちょに座ってあて  
ぢろっと一づこっちを見る  
それからじつにあわてたあわてた  
黄いろな箸を二本びっこにもってあて  
四十度ぐらゐの角度にひろげ  
その一本で

熊はもぐもぐ口の飯を押してゐる  
 おれはたしかにうしろを通る  
 こんどはおれのうしろの方で  
 大将おそらく興奮して  
 味もわからずつづけて飯を食ってゐる  
 然るにかうきっぱりと勝つてしまふと  
 あとが青黒くてどうもいけない  
 とは云ふものの別段おれは  
 何をしたといふ訳でない  
 向ふで勝手(マ)で 播いたのを  
 向ふで勝手にかったのだ<sup>7)</sup>

口語詩「憎むべき『隈』弁当を食ふ」は、賢治が下根子桜に移ってからの、地元の人々との謂わば葛藤を表しているのではないかと思われる。地元民の1人が賢治のところへ毎晩女が通ってくるなどといふらしていたらしく、この憎むべき人物を「隈」（後半2箇所には「熊」と表記）という仮名で呼んでいるのである。

この口語詩「憎むべき『隈』弁当を食ふ」を、死の床で文語詩に改めたのが無題「[秘事念仏の大師匠]」の[一]（以下、「秘事念仏の大師匠[一]」と表記）である。ここには「隈」という人物は登場しないが、下書には「憎むべき『寅』飯をはむかも」とあり、やがてこの「寅」も姿を消し、秘事念仏の大師匠が妻子と弁当を食う場面となる。

秘事念仏の大師匠、元真斎は妻子して、北上岸にいそしみつ、いまぞ昼餉をしたゝむる。  
 卓のさまして緑なる、小松と紅き萱の芽と、雪げの水にさからひて、まこと睡たき南かぜ。  
 むしろ帆張りて酒船の、ふとあらはるゝまみまじか、  
 をのこは三たり舷に、こちを見おろし見すくむる。  
 元真斎はやるせなみ、眼をそらす川のはて、塩の高菜をひた嚙めば、妻子もこれにならふなり<sup>8)</sup>

この文語詩「秘事念仏の大師匠[一]」からは、春の軟らかな陽ざしと南風の中で、昼餉をとっている秘事念仏の指導者とその妻子の穏やかな姿が伝わってくる。北上川を航行する酒船は、むしろ帆を張っているというから、藩制時代の小繰舟（北上川の物資輸送の川舟の一つで、盛岡から北上までは小繰舟、北上から石巻まではひ

らた舟と呼ばれる帆舟を用いた。北上川の舟運は、明治維新後の廃藩置県で主要な役割を終え、明治22年に東北線が盛岡まで開通すると、急速に衰えた）を思い浮かべることができるのかな光景である。

ただ、「をのこは三たり舷に、こちを見おろし見すくむる」には、ある種の緊張が窺われる。秘事念仏の指導者になぜ「見すくむ」のであろうか。あるいは作者とまともに目を合わせたからであろうか。だが、いずれにせよ、口語詩「憎むべき『隈』弁当を食ふ」に見られる憎悪の感情は消し去られている。

賢治には別にもう一つ、口語詩無題「[秘事念仏の大元締]」（1927年5月7日作）があり、これが文語詩「秘事念仏の大師匠[二]」になる。口語詩の下書き原稿を見ると、もともとは「ロシア帝政派の大將株」という書き出しであったことがわかる。

秘事念仏の大元締が  
 今日息子と妻を使って、  
 北上ぎしへ陸稲播き、  
     なまぬるい南の風は  
     川を溯ってやってくる  
 秘事念仏のかみさんは  
 乾いた牛の糞を捧げ  
 もう導師とも恩人とも  
 じぶんの夫をおがむばかり  
     緑青いろの巨きな蠅が  
     牛の糞をとびめぐり  
 秘事念仏の大元締は  
 麦稈帽子をあみだにかぶり  
 黒いずぼんにわらじをはいて  
 よちよちあるく鳥を追う  
     紺紙の雲には日が熟し  
     川は鉛と銀とをながす  
 秘事念仏の大元締は  
 むすこがぼんやり楊をながめ  
 口をあくのを情けながって  
 どなって石をなげつける  
     楊の花は黄いろに崩れ  
     川ははげしい針になる  
 下流のやぶからぼろっと出る  
 紅毛まがひの郵便屋<sup>9)</sup>

さて、この口語詩と最初に掲げた文語詩とを  
 どういうふうに読み取れば良いのか困惑する  
 が、いずれ非常に屈折した詩であるように思う。  
 「秘事念仏の大師匠」に対する見方がストレート  
 でないという気がする。

例えば、文語詩で、この大師匠の子供が口を  
 ぽかんと開けて楊の枝を眺めている。それに歯  
 ぎしりをして石をはっしと投げつける。口語  
 詩では、「口をあくのを情けながって/どなって  
 石をなげつける」ある。「秘事念仏の大師匠」の  
 息子は実に凡庸なのであり、大師匠自身も短気  
 で寛容的ではない。その後、文語詩では、「練肥  
 を捧げてその妻は、ただ恩人ぞ導師ぞと、おの  
 が夫を拝むなり」と続く。口語詩でも、「乾いた  
 牛の糞を捧げ/もう導師とも恩人とも/じぶんの  
 夫をおがむばかり」とある。「よちよち歩く鳥を  
 追ふ」大師匠は、「秘事念仏のかみさん」にとっ  
 ては、「導師」であり「恩人」ではあるが、実に  
 こっけいな存在として描かれているのである。  
 すこぶる揶揄的であるといっても良からう。

この元真斎について、高橋梵仙氏は『かくし  
 念仏考 第二』で、「宮沢賢治の親友佐藤昌一郎  
 氏が、作者から直接聞いたこととして語ると  
 ころによれば、小舟渡で「秘事法門」を行って  
 いる仮名の大師匠を詩題にしたものであるとい  
 う。或は元真斎とは花巻デッコ佐藤勘蔵を指し、  
 「その妻」とはタマを意味するもの歟。詳しくは  
 考へたい」という<sup>10)</sup>。

詩材のつながりから、「元真斎」は「隈」であ  
 ろう。とすれば、下根子桜あたりに住む渋谷地  
 派の指導者（導師や脇役、あるいは世話人）と  
 考える方がむしろ良いように筆者は思う。ただ、  
 賢治から直接聞いたといい、また、「大師匠」と  
 いう物言いに似つかわしいのは、当時としては  
 小舟渡に住む八重畑派の大導師（善知識）佐藤  
 勘蔵をさしているようにも思える。しかし、後  
 出するが、「春と修羅 詩稿補遺」の口語詩無題  
 「[熊はしきりにもどかしがって]」に登場する  
 「隈」（熊）は、賢治を酒呑みに誘っており、確  
 かに下根子桜あたりに住む人物である。

なお、他に口語詩「廃屋手入」（「[あしたはど  
 うなるかわからないなんて]」の下書稿）の冒頭

にも次のような箇所がある。

いきなり窓から飛び出したのは  
 小友から来た大工弟子  
 だだ二足で  
 [(一行不明) ⇒ 松の下まではねて来て]  
 釘をつまんでほらかけに入れ  
 また一つつまんで口に入れて  
 たちまち窓へ飛び込めば  
 日が照って日が照って<sup>11)</sup>

この一行目は、校本全集の口絵写真によると、  
 赤インクで「いきなり」が棒線で削除され、「窓  
 から」の下に「黒く」が挿入され、「飛び出した  
 のは」に続けて「魔法使ひの弟子ではなくて」を  
 加筆し、さらに「魔法使ひ」を棒線で削除して  
 横に「秘事念仏」と書き入れている。つまり、「窓  
 から黒く飛び出したのは秘事念仏の弟子ではな  
 くて」としているのである。

この詩は下書稿で終わったようだが、昭和元  
 年4月、賢治は豊沢町の実家を出て、下根子桜  
 の別宅で独居自炊生活に入るのに先立って修理  
 改装したときの模様をモチーフにしたのであろ  
 う。この家は、周知の通り、現在、花巻市宮野  
 目の県立花巻農業高等学校に移築されている  
 が、ここでいうような「廃屋」ではなかったし、  
 「雨ニモマケズ」の詩にある「野原の松林の片隅  
 の藁ぶきの小屋」でもなかった。祖父喜助の療  
 養のために建てられた宮沢家の別荘で、妹とし  
 もここで病を養った。大工を入れて、羅須地人  
 協会の設立に向けて手を加えたのであろう。

その大工の一人が「秘事念仏の弟子」で、こ  
 こでは別な小友（現在の遠野市小友町<sup>12)</sup>）であろ  
 うか）からやってきた「大工弟子」の姿を生き  
 生きととらえている。一方の「秘事念仏の弟子」  
 である大工は、花巻の町場に住んでいたのか、下  
 根子桜に住む者かわからないが、いずれ地元の  
 大工であったのだろう。

「隈」といい、「元信斎」といい、「秘事念仏の  
 弟子」である大工といい、下根子桜に移り住ん  
 だ賢治は、日常的に「秘事念仏」の人々に接し  
 ざるを得なかったのである。

## 2. 花巻地方の隠し念仏

### (1) 光太郎の参加した異様な宗旨

高村光太郎に、「かくしねんぶつ」(『典型』)と題する詩がある。

かくしねんぶつ  
 部落の道の曲りかどの松の木の下に  
 見真大師の供養の石が立ってゐる。  
 旧盆の十七日に光徳寺さまが読経にくる。  
 お宿は部落のまはりもち。  
 今年の当番は朝から餅をつき、  
 畑のもので山のやうなお膳立。  
 どろとした般若湯を甕にたたへて  
 部落の同信が供養にあつまる。  
 大きな古い仏壇の前で  
 黒ぼとけさま直伝の  
 部落のお知識さまがまづ酔ふと  
 光徳寺さまもみやげを持って里にかへる。  
 あとでは内輪の法論法義。  
 異様な宗旨が今でも生きて  
 ロオマの地下のカタコムブに居るやうな  
 南部の曲り家の暗い座敷に灯がともる。<sup>13)</sup>

高村光太郎は、昭和20年5月、宮沢賢治の実家に疎開し、終戦直前の花巻空襲で宮沢家が焼失したため、終戦後は郊外の旧太田村山口に山小屋を設けて移り、以後7年間、そこで独居生活を送った。

その疎開や独居生活を支援した1人、花巻病院の院長佐藤隆房は、宮沢家とも深い交際をしていた人で、著書には『宮沢賢治』(富山房、1942年)、『高村光太郎山居七年』(高村記念会、1962年)がある。

『高村光太郎山居七年』の「高橋円治郎さん」の項には、この詩の成立する背景が次のように語られている。

山口部落の路をたどって行くとその中程の南側に大きな萱葺きの百姓家があります。その当主は高橋円治郎さんで、高村先生より三つ四つ年長でした。その素朴な性質が先生の精神にマッチしている見え、山口でのもっとも親しい話相手でした。円治郎さんの小屋行は日毎つくという程で、先生も時折円治郎さん宅を訪問しました。米を贈り、ソバが穫ればソバ粉

を、餅をついてはアンモチやクルミモチをと円治郎さんは親しげに小屋にとどけました。

二十一年八月十四日(旧盆七月十七日)円治郎さん宅で、見真大師の供養会が催されました。円治郎さんはよい機会だと考えて、円万寺の多田等観さん<sup>14)</sup>や、町の光徳寺さん<sup>15)</sup>を招き、そこに高村先生を招待しました。集まった講中の人々のご馳走のしたくをし、仏行事はなごやかに行われましたが、先生と多田等観さんの交際はこの時がその始りです。<sup>16)</sup>

また、同書「かくし念仏」の項には、詩材は隠し念仏ではなく、見真大師の供養の集まりだったと、次のように記されている。

先生はかくし念仏を充分に知ったと思ったようですが、せんさく好きな先生もこれは考え違いで、ここにかいたのはかくし念仏ではなく見真大師の供養の集まりのことでした。やはりかくし念仏は高村先生でも、その信者にならない限り、はっきり解らなかつたようです。<sup>17)</sup>

しかし、実際には「見真大師の供養の集まり」そのものが、この地区では隠し念仏の行事の一つであった。

見真大師は、明治9年に下賜された親鸞の諡である。隠し念仏の有力な一派である渋谷地派では、親鸞の650回忌などを記念し、和賀・稗貫・下閉伊地方の講中が競ってその供養碑を造立している。たとえば、篤信地方の一つである和賀郡東和町では、土沢・上中内・下中内・浮田・小通・落合・南成島・谷内・倉沢・砂子・晴山などの地区に、合計16基の見真大師碑が造立されている(『東和町史』民俗編)<sup>18)</sup>。また、北上市和賀町でも岩沢・山口・煤孫・岩崎梅の木・岩崎夏油・岩崎蒼前・横川目荒屋・横川目下村・横川目松の木・笠松・堅川目・藤根・長沼など大半の地区で造立、合計13基にのぼる(『和賀町の石造文化財』)<sup>19)</sup>。

見真大師碑の供養は、和賀町岩崎蒼前の場合、親鸞の御正忌(「お七夜」と呼ばれる報恩講の最終日、11月28日)の夕刻に、碑前で講中の者が集まり、親鸞作の「正信偈」を導師の音頭で唱和し、導師宅で共同飲食を行っている。また、盆にも香華を手向けている。同梅の木地区でも盆

にも拝み、11月28日昼に碑前で「正信偈」を唱和し、当番のヤドで共同飲食を行っている。

だから、光太郎が詩材としたのもそうした見真大師の供養法会の一つである。「黒ぼとけ」「お知識さま」も隠し念仏用語である。

その見真大師碑（明治28年9月28日建立、650年回忌）は、現在でも「高村山荘」へ向かう道の傍らに親鸞<sup>(マツ)</sup>上人碑（昭和38年8月6日建立、700年大遠忌）・慧燈大師碑（慧燈は明治15年に下賜された蓮如の諡）などともに立ち、盆には「十七日講中」と称する人々によって、光徳寺の住職を招いて法会が営まれ、香華が手向けられている。

光太郎は地元の人達に招かれて、隠し念仏の講中の行事に参加した。みんなでどろっとした般若湯を飲んで帰る。「異様な宗旨」がそこにはあるが、温かい目を向けており、「南部の曲り家の暗い座敷に灯がともる」と結んでいるのが印象的である。この詩からは盆の法会の雰囲気がよく伝わってくるし、こうしたことを積み重ねることで、光太郎は地元民に融け合った。野菜をもらったり、子供達に話を聞かせたりしながら、生活をともにして行ったのである<sup>20)</sup>。

一方、先に見た通り、宮沢賢治は隠し念仏に対しては複雑であった。文語詩「秘事念仏の大師匠 [二]」は、見方によれば揶揄的だったし屈折もしていた。父親の浄土真宗に強く反発し、法華経にのめり込んでいった賢治。その彼が接する大多数の農民は、実は浄土真宗本願寺から異端・邪義・秘事法門と指弾された隠し念仏の信徒であった。

口語詩「憎むべき『隈』弁当を食ふ」は、羅須地人協会を設けるため下根子桜の別宅に移った賢治と、反感を持つ地元の人々との軋轢を示しているとされていた。地元民の一人が賢治のところへ毎晩女が通ってくるなどと言いつらしていたらしく、この憎むべき人物を「隈」という仮名で呼んでいたのである。賢治は秘事念仏の大師匠を認めるわけにはいかなかった。そこに雑多な信仰を許さない熱烈な法華行者の姿があった。しかし、その潔癖さが地元民との間に疎遠にしていったのである。

## (2) 隠し念仏とは何か

ところで、宮沢賢治が「秘事念仏」と呼び、高村光太郎が「隠し念仏」と称した信仰とは、如何なる信仰なのであろうか<sup>21)</sup>。また、明治から昭和にかけて、その信仰が花巻において如何なる状況にあったのであろうか。

「秘事念仏」は、本願寺から邪義・秘事法門などと指弾された浄土真宗の異端の一派である。岩手県内の結社や信徒側では「御内法」「御内証」などと称すが、宗教学用語ではカクレ信仰の一つ「隠し念仏」と呼び、岩手県や宮城県の一部に分布する。内容的には真言の秘密念仏と真宗念仏が習合したものと考えられるが、各結社の説明では、真宗には僧侶の広める「表法」とは別に、蓮如などを淵源とし、在家方に伝授された「内法」があり、それが京都の鍵屋から伝えられたというのである。

宝暦年間、水沢地方で爆発的に流布したため、脅威を感じた仙台藩では、宝暦4年（1754）真宗僧侶の提訴を入れ、邪宗として主導者の山崎左衛門らを磔刑にし、以後断続的に弾圧した。また、盛岡藩でも、左衛門の法難を逃れた一部が潜入して地下組織を作り、和賀・稗貫・紫波地方などに広まった。盛岡藩の弾圧をみると、花巻の南、現在の北上市二子町で指導していた及川立益（順証）が捕縛され、花巻の川口町で籠居、次いで盛岡の本誓寺に預けられたが、ここでも布教活動をしたので再度蟄居となり、文政9年（1826年）に死亡している。

秘密結社的色彩が濃いので、地域ごとに独立する傾向が強く、分派は上幅派・水沢派・渋谷地派・八重畑派・紫波派など十数派に及んでいる。その組織は各派で多少異なるが、最も流布した渋谷地派の場合、本部渋谷地（胆沢町南都田）の下に教区や講中があり、大導師（大センセイ）一励法員（教区を統括する）一導師（センセイ）・脇役（オワキ）・世話人などの役があって、組織の運営や諸行事を営んでいる。

浄土系の信仰であるから、弥陀の本願を信じ、極楽に往生を遂げようとする信仰に違いないが、真言の秘密念仏でいう「即身成仏」の信仰が深くかかわっており、その信心の獲得時に最

大の関心を於いているのが特徴である。即ち、最も重要な儀式が嬰兒の誕生直後に行う「オモトヅケ」と、その子が6・7歳前後から12・13歳頃に行う「オトリアゲ」。また、大人が新たに入信する場合にも同様な儀式がある。いずれ、信心を獲得し、即身成仏が決定する儀式である。

オモトヅケはすべての派で行っているわけではないが、渋谷地派などでは赤子を誕生後できるだけ早い時期(7日以内が最も良いという)に受けさせる儀式で、導師によって謂わば信心の種を渡すと解釈できる。赤子を抱いた親か祖父母が阿弥陀如来像の前で、子に代わって導師の口跡をまね、弥陀の本願を信ずる誓いをなすのである。

次いで、その子が6・7歳前後から12・13歳頃までに行うのがオトリアゲ。導師の指示に従い念仏や「タスケタマエ」を息の続く限り唱え、その相格によって成仏可能か否かが判断される儀式。大人が新たに加入する時も同様な儀式を受る。もともとは、大人が事前の厳しい審査の後に秘密裏に受けたものだったが、ムラ中がおしなべて加入すると、対象は子供達になった。オトリアゲに合格すると、導師から「改悔文」や日常守るべき生活規範、月3回の精進日などが申し渡され、みんなに誉められ、御馳走がふるまわれる。

戦後まで、その秘儀性のために様々な誤解や糾弾を受けたが、構造的にはキリスト教カトリックの「幼児洗礼」と「堅信礼」との関係によく似ており、孫祝いや七夜の祝い・名付け・七つ子詣りなど、地域の伝統的な習俗と結びついた通過儀礼的な要素が多分にあったと筆者は考えている。胆沢郡衣川村の月山神社の「七つ子詣り」、水沢市黒石の黒石寺蘇民祭の「鬼子(7歳児)登り」など7歳は大人への重要なステップだったのである。

渋谷地派では地区ごとに講を組織し、末端の講中で定例に行う法会には、正月8日のオヒモトキ、春のカイゴウ(会合)、秋のオトリコシ(お取越し)、11月22日～28日のオンチャ(お七夜・報恩講)などがある。その勤行は阿弥陀如来を本尊とする仏壇の前で、導師の音頭で親鸞

の「正信偈」(浄土信仰を広めたインド・中国・日本の高僧をうたった漢詩)と「和讃」を唱和し、蓮如の「御文章」(信者宛の蓮如の手紙)を聴聞する。

その他、本部の大導師を招いて法座が開かれ、死者が出ると旦那寺の住職による葬儀の一方で、同信同行の講中の人達によるネンブツモウシ(念仏申し)を行う。謂わば二重の葬儀が行われているのである。

ところで、なぜ、隠すのであろうか。東北の隠し念仏は、端的に言えば、江戸時代、熾烈に救いを求めた民衆が、苛酷な宗教統制を行う幕藩権力、及びその末端機構に組み込まれて形骸化した仏教寺院から、自らの信仰を守ろうとする、その対処の仕方「カクレ信仰」となったものである。追いつめられた信者達は地下にもぐり、「カクレ」として信仰を守り続けるしか術はなかったのである。

ところが、「カクス」必要がなくなった近代でもこの姿勢は続くので、そこには、受動的な「カクレ信仰」から、能動的な「カクシ信仰」への展開が認められる。そして、その「秘儀性」を教えの真淵さ・真実さに結びつけて説き、弾圧されるから「カクス」のでなく、教えが深淵だから「カクス」ことを要求されたように見える。しかし、実際は近代に於いても、昭和初年の青森県八戸市警察署の不当介入のような例は続いたし、本願寺の側からいけば、「秘事法門」「邪義」「異端」であったから、その強大な権力から押された烙印はつきまとい、そこから「カクレ」なければならなかったのである。

### (3) 花巻の隠し念仏

明治から昭和にかけての花巻地方における隠し念仏の状況であるが、次のような派の活動が見られる。

#### ① 雲随派

雲随派は太田派ともいい、近江出身の僧雲随によって始められ、明治初めから昭和にかけて花巻の町場から周辺部で行われた派。雲随は胆沢地方のある寺の住職をしたこともあり、桜井派の派祖桜井源作から受伝後、花巻市鍛冶町の阿弥陀堂(浄土宗勝行寺)に移り、寺小屋を開

き子供達を教育しながら、一方で布教活動をしたという。だが、同町の安浄寺（浄土真宗大谷派）住職泰全から、その教説は「秘事法門」と糾弾され、明治16年、82歳の時、花巻を去って故郷へ向い、石巻に立ち寄った後、消息不明になった。

雲随の後継者は明治3年に受伝した花巻鍛冶町の魚問屋太田善五郎（明治22年没）で、彼によって同派の基礎が固められた。以後、花巻下町の照井仁太郎（明治17年没）、同照井徳助（明治23年没）、同川村悦蔵（大正7年没）、花巻向小路の小原久之助（昭和12年没）などに受け継がれたが、やがて町場から近郊の花巻市北笹間の小原久次郎（笹間初代、昭和21年没）、同市轟木の佐々木金五郎（笹間2代、昭和35年没）、北上市更木の斎藤重蔵（更木初代）と広がった。現在では花巻市笹間・太田、北上市更木などで行われているというが、詳しくは不明である。

なお、雲随を「秘事法門」と糾弾した泰全の安浄寺は宮沢家の菩提寺で、後に賢治の父・政次郎が檀家総代になっている。政次郎が9歳、祖父の喜助が44歳のことであった。また、雲随を追慕する人々は多く、阿弥陀堂裏の高台に追慕碑が建立されている。碑には、「蓮社良正諦観和尚/明治十六年癸未三月一日」とあり、雲随が花巻を出立した日をもって命日としている。

## ② 小舟渡・八重畑派

小舟渡派と、それから出て、やがてそれを包含した八重畑派。

小舟渡派は、幕末から明治にかけてかなり栄え、本拠地を花巻市小舟渡に置いた。派祖佐藤重蔵は、高橋梵仙氏によると、木村養庵の直弟子の御堂儀兵衛系統で、積順証の流れを汲む盛岡穀丁の伊助より受伝したという<sup>22)</sup>。また、別に大正7年に佐藤勘蔵が作成したという「相承善知識系図」には、重蔵は、順証の弟子の二子村の儀右衛門から付属され、第2代佐藤嘉兵衛、第3代佐藤福松と相伝されたとある。しかし、当初より他派との集合離散が多かったらしく、確かなことは不明。その重蔵より付属を受けた者に佐藤安蔵がおり、その系統が勢力を伸ばして、小舟渡派は包含された。これが八重畑派である。

八重畑派は、稗貫郡石鳥谷町八重畑に本拠地を置き、明治中期から昭和20年代にかけて、稗貫・紫波・岩手郡から青森県八戸市までの岩手県中北部を非常な勢いで広まった。八重畑派の系図は小舟渡派と深くかかわり、初代佐藤安蔵（明治16年没）、2代佐藤賢吉（大正8年没）、3代佐藤小次郎（昭和5年没）は、いずれも小舟渡派から付属されている。謂わば、小舟渡派によって常に正統性を補強して行き、佐藤勘蔵（昭和30年没）時代には桜井派や渋谷地派とも結びつこうとした。しかし、やがてこのことが災いし、高橋梵仙氏の仕掛けた名誉毀損訴訟では、正統性のなさを半ば立証され、邪義・秘事法門の烙印を押されて、八重畑派の本流は壊滅状態になった<sup>23)</sup>。

しかし、小舟渡派を含めたこの派の流れは、佐藤重蔵時代に付属した者達の末流を加えると、かなり広範囲に渡り、一大流派となった。即ち「相承善知識系図」によって善知識の居住地から篤信地を押さえると、花巻市小舟渡以北の北上川東岸地域の、主として花巻市矢沢、東和町小山田、石鳥谷町八重畑・新堀、大迫町全域、紫波町山屋、盛岡市梁川・米内・大志田、玉山村玉山・日戸、葛巻町全域、及び青森八戸市是川、同階上村などとなり、それらの地区では、秘密結社的な側面を強く保ちながら、現在でも行われておる。特に葛巻地方では盛んである。

ちなみに、小舟渡は花巻バイパスの東側、賢治の名付けたイギリス海岸のある北上川西岸一帯で、川岸にそって南下し支流豊沢川河口を渡れば、賢治が羅須地人協会を設けた下根子桜であった。

## ③ 渋谷地派

渋谷地派は、正式には「渋谷地念仏講中」と称し、本部を胆沢郡胆沢町南都田に置いている。派祖は渋谷地教詮（武七）。その成立は、宝暦4年（1754）の山崎左衛門法難において、盛岡藩領山口村に逃れた武七によって組織化されたものという。渋谷地派は岩手県下に最も教線を張っており、主な篤信地は、胆沢町南都田、西和賀を除く旧和賀郡一円（北上市、東和町）、花巻市湯口、下閉伊郡川井村などである。



組織は、本部のもとに地方部があり、教区(22教区と教区外)を設けている。その教区を統括するのが励法員で、導師(センセイサマ)の中から本部役員とともに選出される。講中は、日常活動の便宜上から最小の集落単位程度の部落講中と幾つかの集落を合わせた地区講中とがあり、地区ごとに導師がおり、そのもとに2・3名の協役(オワキサマ)と若干名の世話人がいる。大導師は第10代目及川忠雄氏で、渋谷地の及川家が世襲している。

昭和34年の釈堅正著『渋谷地』(著者刊騰写版)によると、花巻南部は第5教区に属し、励法員は花巻市諏訪の佐々木西松で、区域は花巻町南部下根子・笹間・飯豊・成田・太田の一部、役員数は導師19人・協役51人・世話人110人となっている。なお、第6教区は花巻市湯口・湯本の一部・小瀬川・太田の一部で、励法員は花巻市鍋倉の高橋周助。第8教区は花巻市矢沢(但し南部を除く)で、励法員は佐藤正録となっている。

以上のように花巻地方では、①雲随派、②小舟渡・八重畑派、③渋谷地派の三派の活動が見られる。

先にあげたように盛岡藩に捕らえられて花巻の川口町で籠居し、後に盛岡の本誓寺に預けられた及川立益(順証)が文化文政年間頃に寄留し、その有力な弟子が川口町にいた。明治初年頃から花巻の町場で、阿弥陀堂に住した雲随が教えを説き、その系統が昭和まで続いた。また、小舟渡には江戸時代末に小舟渡派を作った佐藤重蔵という指導者が登場し、その流れを汲む同地の佐藤勘蔵は、北上川東岸沿いに花巻から県北部地方まで広まった八重畑派の指導者であった。花巻の南の方では、北上市から岩手県下全域に分布する渋谷地派の22ある教区の一つを預かる励法員が下根子の諏訪にいた。その励法員は勘蔵とともに賢治と同時代の人であり、互いに鎬を削っていたのである。

### 3. 賢治と隠し念仏体験

ところで、宮沢賢治の「秘事念仏」に対する

頑なさ、屈折した憎悪の念は、どこから来たのであろうか。単に下根子桜の地で悪意を持って迎えられたからではあるまい。それは近親憎悪の念にも似た感情だから、あるいは、自らの幼児体験から来たものかもしれない。疑えば、ひよっとすると賢治にも、オトリアゲの体験があったのではないか、と思えてくる。宮沢家と隠し念仏と関わりを含め、賢治の隠し念仏体験を次に考えてみたい。

佐藤勝治氏は、「賢治と私の生家のある花巻町豊沢町の思い出(一)」で、次のように自分の幼児体験を回想している。長いが、重要なので関係箇所を引用しておく。

私の家は代々仏教信仰の厚い家で、檀那寺としては十二丁目の円通寺なのであって、本来は禅宗であり、仏壇にはいつも修証義が置いてありました。けれどもいつの頃からか阿弥陀信仰となり、仏前で唱えるのはナムアマダブツでありました。それもよく法然上人のお話を母が聞かせましたから浄土宗でのナムアマダブツだったかもしれません。私も幼い五、六歳のころから、母に連れられてよくお寺にお説教を聞きに歩き、少しの疑いもなく、祖母や両親をまねて夜屋「ナムアマダブツ」—これを方言になおすと「ナンマンダンス、ナンマンダンス」と唱えておりました。(中略)

ところで、私のうちは葬式は町の中、大工町の松庵寺という真宗の仮寺で禅式で行ったわけですが、唱えるのはナムアマダブツ、しかも私は五、六歳の頃、かくし念仏で仏前で誓いを立てていました。夜おそく、かくし念仏の先生方が三人やって来て、その上どこからともなくこっそりと十人ばかりの男女が集まって来て何かを唱え、私たち洗礼(?)を受けることも、四、五人は屏風をまわした中に入って、仏前、といってもいつもの仏さまは閉ざして、先生方の持って来た掛図のようなのを下げた前で、「ナー」と息が切れるまで声を出した時、大先生が茶わんの水滴を三滴私の額にたらしめて式は終わりました。何か秘密っぽい、ものものしい様子で、その時一緒に洗礼を受けた仲間はみな知らないこどもばかりでした。そうして、この事は決してひとにしゃべってはいけないと、大先生がおごそかな口調でいいました。私はいつのまにかたいへんなことになってしまったと、不安でなりません。翌日母が「お前はほんとうに仏さまの子になったのだから安心だ。だが決してゆうべのことはひとにしゃべるなよ」とこれもいつにないきびしい口調でいいました。

つまり私の家では正式には(おもてむきは?)禅宗、説教は法然上人の浄土宗、葬式は真宗の寺、真実の信仰はかくし念仏という三重四重の信仰で、それがその頃の町家の信仰形態だったわけで、シンクレティズムなどという学者の分類にも入らない日常を何一つ疑わず、安穩に暮らしていたのであります。その上父は神主の家から来ました。

さてこのお説教好きお寺参り好き、かくし念仏を後生大事に信仰しつづける私の母は、やはり慈悲の仏教徒でありまして、ひとにはとても親切、世話好き、お嫁さんの世話まで引き受けてはしり廻り、同居している息子達の嫁三人も平等に可愛がり、自分の好きな芝居や活動写真にもたびたび出してやるという、世間にも評判のよい模範しゅうとめであります。そして町内の女たちのボスでもありました。<sup>24)</sup>

「説教は法然上人の浄土宗」という点に若干の思い違いがあるような感じもするが、かつて雲隨が阿弥陀堂(浄土宗、勝行院)にいて隠し念仏を説いていたことを考え合わせれば、必ずしも不自然ではない。また、菩提寺の円通寺(曹洞宗)を建前とし、本音の信仰として隠し念仏があったという点は事実であろうし、5・6歳の頃に受けたオトリアゲの回想も、筆者の他地域での調査<sup>25)</sup>から見て十分に信ずることができる内容である。

とすれば、「真実の信仰はかくし念仏という三重四重の信仰で、それがその頃の町家の信仰状態だった」とあるように、同じ町内(川口町、後の豊沢町)の宮沢家でも同様な信仰形態にあったと憶測できるのである。

しかし、少なくとも現在までに公開されている資料からは、宮沢家と隠し念仏とを結びつけることはできない。特に、栗原敦氏が行った賢治の父親・政次郎の暁烏敏宛書簡の綿密な分析(『宮沢賢治—透明な軌道の上から』の「序景宮沢賢治」)<sup>26)</sup>は信用できる。ここには政次郎が浄土真宗改革派の旗手・暁烏敏に、本山で異端とする「秘事法門」に関する花巻地方の情報を伝えたり、相談したり、見解を求めたりした形跡がない。

だから、筆者は宮沢家と隠し念仏とを安易に結びつけるべきではないと思っている。だが、その一方で全くそうした痕跡がないことに戸惑い

を覚えるのも事実である。町内を始め広く花巻の町場でも行われ、後に檀家総代となる安浄寺で、かつて住職泰全が雲隨の教説を「秘事法門」と糾弾し、結果として花巻から追放した事件があったのにも関わらず、全く触れなかったのであるから。政次郎が故意に口をつぐんでいたとしたら何故であろうか。

佐藤勝治氏はオトリアゲを受けた後、母親から「お前はほんとうに仏さまの子になったのだから安心だ。だが決してゆうべのことはひとにしゃべるなよ」と厳しい口調で諭されたと回想していたように、通常、導師から幾つかの戒めが申し渡されるが、その一つが他人に今日のことを決して語ってはならないという戒めである。もちろん、オトリアゲのことばかりか、隠し念仏に関わることはすべてそうであった。

弟の宮沢清六氏に次のような回想がある。中学生の兄賢治に連れて行ってもらった安浄寺での報恩講の思い出である。

私がまだ小学校に入らなかったころのことです。冬休みで盛岡中学校から帰った兄に、その頃菩提寺だった安浄寺の報恩講につれて行ってもらったものです。

お寺は浄土真宗で、たくさんの子供達が集まって、真白な餅せんべいに太い縫針を打ちつけて、それを静かに引き上げて遊ぶ「せんべい刺し」や「ねまり相撲」などをやっていたのですが、おつとめの鐘が鳴り出しますとみんなしんとなって、本堂に向かって静かになったものです。兄は紺の着物に袴をはいて、ちゃんと坐っていたものですが、私は間もなくねむくなってきて、読経が林の中の蟬時雨のように聞えたり、太い絵蠟燭の焰が次々とのびたり縮んだり、やがてそれがぼんやり霞んでしまうのでした。そして夢のように老僧の説教を聞いたと思います。<sup>27)</sup>

勤行は、隠し念仏の講中が当番宅で行う報恩講と大差はないが、ここでの雰囲気は寺の広い本堂に大勢の檀家が集まり、子供達も参加しているから明るくはなやいでいる。隠し念仏の講中にあるどことなく秘密めいた暗さは感じさせない。

安浄寺は先に触れたように、雲隨の教説を「秘事法門」と糾弾した泰全が第13世住職を務めた

ことのある浄土真宗大谷派の寺である。開基は蓮如の弟子・弘教坊釈永堅（膝館弾正輝忠）で、旧領地湯口上根子に一字を建立したが、8世円誓の時に花巻郡代四戸金左衛門の帰依によって現在地に移された。

寺宝に蓮如真筆と称する六字名号がある。香を薫じて一心に称名すれば、指頭より細き糸が引き出るので「糸引名号」と呼ばれているそうだが、内藤正敏氏の『聞き書き遠野物語』の「隠し念仏」の項に同種の名号が記されていて興味深い。遠野市土淵の恩徳地区の渋谷地派の導師の家に秘蔵される六字名号は「空蓮上人糸ひきの名号」といい、寄生虫のわいた人が一心に拝むと、手から糸のような毛織糸虫が出てきて不思議に治るので、遠くからも寄生虫に悩む信者が集まってにぎわったという<sup>28)</sup>。いずれ、阿弥陀仏などの仏像や仏画の手から五色の糸をたらし、臨終の際にその糸の端を握って一心に極楽往生を願った信仰の土着化したものであろう。雑行雑修を嫌う浄土真宗寺院と言えども、同種の雑多な庶民信仰が入り込んでいるのである。

政次郎はこの安浄寺の檀家総代を務めている。だが、その故に、宮沢家が隠し念仏とは無関係だと決めつけることもできない。

筆者は、数年前に花巻市愛宕町の妙円寺（真宗大谷派）で、管区内の住職方の研修会に隠し念仏の話をしたことがある。その時、同寺の総代方も聞いておられた。話終えて控え室にもどると、2人の総代がそっとやって来られ、実は自分達は隠し念仏の世話役をしており、本音の部分では隠し念仏を信仰してきたのだが、と語って行かれたことがあった。話の内容と居住地から、渋谷地派の教区導師ないしは脇役・世話人と思えた。現在でもそうだから、本音の信仰を表面から垣間見るとはかなり難しいのである。

客観的な状況からいうと、賢治の生きた明治30年代から昭和10年頃ならば、花巻の町場に住んでいる者でも、多くは隠し念仏のオトリアゲを受けている。賢治がオトリアゲを受けたとしても決して不思議はないし、政次郎がその仲間の1人だったとしても驚くことではない。

政次郎が暁烏敏を招いて仏教講義を開催したのは、浄土真宗の中でも特に在家の人々が真宗内部の改革派の考え方を支持したからである。宮沢家と親交の深かった二戸郡浄法寺町の高橋勘太郎は在家の篤信家で、「妙好人」として知られた人である。暁烏敏の招聘にこの人の果たした役割が大きかった。

小倉豊文氏は、高橋勘太郎について『宮沢賢治聲聞縁覚録』で、次のように語っている。もし、これが実像を伝えるものだとしたら、隠し念仏の指導者とほとんど区別をつけがたいように思う。

勘太郎さんは盛岡や花巻に時々出て来るだけで、平常の行動範囲は岩手県最北端の山間地帯—いわゆる日本チベット—である二戸郡と九戸郡の村々に限られていた。行動範囲といっても、勘太郎さんは在俗人であって出家人ではない。いわゆる居士だ。また如何に仏教に通じているからといって、説教を押し売りして歩くような人ではない。生計の為に文房具・雑貨・化粧品などの行商をしていたのである。そして求められるままに法を説き道を伝えていたのである。時には坊さん代理に葬式の導師役を勤めていたという。

勘太郎さんの仏教の勉強は、いわゆる高僧碩学についたのではない。少年時代に盛岡に出て、味噌醤油醸造業の池野権治という人の家に七年間奉公していた間になされたのである。池野家というのは江戸時代の寛永年間、盛岡の城下町が開かれると同時に開業した盛岡きっての古い商家であった。そうして権治という人が仏教の篤信家であり篤学家であった為に、所蔵の仏典もたくさんあり、それを権治翁の指導で勉強したのが、勘太郎さんの仏教親交の基礎になったのである。<sup>29)</sup>

小倉氏は他にも勘太郎の逸話を幾つか記している。それはともかくも行商の傍ら時に布教活動を行い、葬式の導師役を勤めていたとあるが、これでは「念仏申し」などと称して二重の葬儀の一方を執り行う隠し念仏の導師役と変わりない。これでオトリアゲを行えば導師そのものである。だから、暁烏敏に深く交わり、その送付してくれる多数の書籍などに学ぶことがなかったら、浄土真宗で尊ばれる「妙好人」と呼ばれることもなかったに違いない。ちなみに、賢治

が読んでふるえるほどの感動を得た島地大等編著『漢和对照妙法蓮華経』は、勘太郎が政次郎に贈ったものという。

賢治が3歳の時に、伯母やぎが離婚をして実家にもどって来た。賢治は親鸞の「正信偈」や蓮如の「白骨の御文章」を一緒に暗唱したといわれるが、類話は隠し念仏の篤信地域にままする。例えば、北上市出身の画家・阿伊染徳美氏は2歳と何カ月のころ、「御文章」を暗唱していたので村のバアさまたちから拝まれたと著書『わがかくし念仏』で語っている<sup>30)</sup>。あるいは、やぎには嫁ぎ先か、幼児期にオトリアゲを受けたのかもしれないが、そうでなくとも宮沢家が在家仏教の有力な篤信者の家であったことは間違いない。

いずれにせよ、花巻では町場には雲随派が行われ、一方で小舟渡・八重畑派、他方で渋谷地派が鎬を削っていた。そうした中で、現在まで公開されている資料や関係者の回想記の類から判断する限りでは、宮沢家はこれらの隠し念仏とは一線を画していたかのように思える。だが、仮にそうだとしても、他方で政次郎は自らの信仰の拠り所を他に強く求めていたといえる。それは保守的な既成寺院にはなく、改革派の暁烏敏にあり、彼について学ぼうとしていたのである。それが仏教講座の開催であった。隠し念仏とは別ではあるが、謂わばその同一線上に置くことのできる在家信仰と考えて良からう。

賢治は、後に熱烈な法華経信仰に転じて行き、父の真宗信仰に強く反発した。しかし、賢治の法華経信仰は、日蓮正宗の行動団体・国柱会に入会したように、既成の日蓮宗寺院のそれではなく、在家仏教的色彩を持つものだったのである。

結局、賢治がオトリアゲを受けたか否かは分からない。仮に宮沢家が隠し念仏と一線を画していたとしても、幼少期に「正信偈」や「白骨の御文章」をそらんじていた賢治である。県北のある村に赴任した教員や警察官の子弟が、ある日、同年輩の友人達がふいに消え、どこかで仏さまを拝まされたらしいが、それについては全く口を閉ざしている現実にあって寂しい思い

をしたという。賢治はオトリアゲを受けなかったとしても、友人達のことを聞けば、心が騒いだだろう。それもまた、一つの隠し念仏体験であったといえよう。

ところで、内田朝雄氏は『私の宮沢賢治』で、雲随を糾弾した安浄寺住職泰全について触れ、秘事法門の門徒の雲随への追慕の思いはそのまま安浄寺につながる人々への憎しみであったろうし、その安浄寺の檀家総代の長男が賢治であったから、松林の小舎に来た賢治を取り囲む眼の厳しさは想像にあまるものがあると指摘している<sup>31)</sup>。

卓見ではあるが、隠し念仏の内部はもっと複雑である。派が違えば、結婚も躊躇した時代であり、結婚してもオトリアゲを改めて受け直させたほどである。下根子桜あたりは渋谷地派の勢力圏であり、小舟渡・八重畑派が南下を窺う所でもあった。彼らに雲随派の憎しみが共有できたか疑問である。賢治の家が檀家総代だとしても、自分達に置き換えれば、講中の世話役の多くは旧家で、菩提寺の総代を勤めることも少なくなかったし、それは謂わば建前の世界であった。

また、森荘巳池氏は「隠念仏との小さな闘い」(『宮沢賢治の肖像』)で、「賢治が下根子桜に入って、羅須地人協会をはじめたとき、大いに闘志にもえ、表面には出さないが、激しく賢治とわたり合った、ひとりの人物がある」とし、「憎むべき[隈]弁当を食ふ」の主人公を挙げて、次のようにいっている。「農学校の先生をやめれば、法華経の護持者・尊崇者・宣伝者・日蓮の行者、そういう賢治であった。詩だとか童話だとかは、彼には関係はない。その賢治が桜の家に来たのである。『隈』さんは、その桜部落の顔きき、つまり賢治を大いなる怨敵とする『有力者』にちがいない」と。そして、「賢治に対する反感の奥に、どすぐろい宗教上の対立意識があり、その一党が隠念仏の信仰者たちだった」という。<sup>32)</sup>

森氏は賢治がかわいがった年少の後輩であり、熱烈な賢治信奉者であった。だから、宗教上の闘いとして捉え、「浄土真宗の信徒の父やそ

の同信とは、賢治は陽に闘ったが、陰の隠念仏とは、賢治は、陰に闘ったのだというのが私の感想」といって理解に努めている。だが、陰に闘うとは何か、今一つ分かりにくい。仕掛けられたとすぐらい陰湿さに対する闘いとでもいうのであろうか。

また、森氏は村の反賢治的雰囲気の中で、「からだをくの字にまげて土をなめるようにおじぎをした老婆」や「誘われて素直に賢治の家にやってきて童話をきかせてもらった幼い者たち」を「隠念仏の組織でかたまっていたのではない」としているが、彼らも実は隠し念仏の一員であった。当時の下根子ではキリスト教や教派神道などの特別な宗旨を持たない限り、押し並べてこの信仰の中にあっただけである。

村人は、本質的には先の佐藤勝治氏の母親のように、慈悲の仏教徒であり、他人に親切で世話好きであったに違いない。どこかでボタンの小さな掛け違いをしたのである。それは町場の旦那衆に小作料を納めている在地農民の一時的な身構えから来たものかもしれないし、音楽好きで新しがり屋の教員経験者に対する異和感であったのかもしれない。しかし、村人の側に立てば、信仰上の相違はあるものの、日常生活での違和感はある程度の時が解決するものであった。賢治に山口の山荘で暮らした高村光太郎ほどのおおらかさと適応性があれば、それほど大きな溝は生じなかったように思う。

賢治には今一つ「隈」を題材にした口語詩がある。「春と修羅 詩稿補遺」の無題「[熊はしきりにもどかしがって]」30行の詩で、その8行目から11行目は次の通りである。

権治が苗つけ馬をひいて  
だんだんゆらゆら近づいたので  
隈はすばやく眼をそらし  
じっと向ふのお城の上のそらを見る<sup>33)</sup>

この人物は冒頭では「熊」となっているが、ここにあるように他の3箇所では「隈」としている。この詩には下書稿が2種あり、下書稿(一)は「『隈』田を植える」と題されている。全38行

の前半部分は次の通りである。

垂鉛いろの水を涉って  
四五人苗を植えてある  
遠くには[雲⇒霧]  
がぶがぶ代を掻いてある馬  
榎の林の影と波  
ところが「隈」が立ってある  
麻もも引のすねを二とこ薬でくくって  
小東な苗をにぎりながら  
水にはいらず驟に立って  
まあ宰領といふかたち  
ちらっと横眼でおれを見る  
それからこんどは途方もなく冷たい眼をして  
じっと向ふのお城の上のそらを見る  
ゆふべ酒を呑みに来いといって  
行かないもんだから怒ってある  
呑まないのを知ってゐながら  
呑みに来いとい [ふばかりか⇒ふのはずるぶん失敬  
なはなしだし]  
今日の田植に[(二, 三字不明)って⇒手伝ひさせる魂  
胆もある]  
[誰⇒○] 恩に着せておいて稼がせやうと考へたって  
誰にもうまくはまらない  
おれ [にはお⇒(三文字不明)⇒にはお] れの仕事が  
ある。<sup>34)</sup>

下書稿(二)でも、改作した文語詩「[あくたうかべる朝の水]」でも、「隈」が酒を呑みに来いと誘い、応じなかった話には触れていない。

賢治には口語詩「藤根禁酒会へ贈る」(昭和2年9月16日作)があり、「しかも諸君よもう新らしい時代は/酒を呑まなければ人中でものを云へないやうな/そんな卑怯な人間などは/もう一びきも用はない/酒を呑まなければ相談がまとまらないやうな/そんな愚劣な相談ならば/もうはじめからしないがいゝ」<sup>35)</sup>と、飲酒には厳しかった。

物言わぬ農民が酒の力を借りて辛うじて口を開く。近年まで、岩手のあちこちで見られた光景である。「卑怯な人間」「愚劣な相談」と正面きって糾弾されれば、首をすくめて冷たい眼でそっぽを向くか、白い眼を剥くより術がなかったのである。

「酒を呑みに来い」とは、「遊びに来い」「話に

来い」と同義である。「隈」の側から心を開いて誘っているのである。それに、「吞まないのを知ってゐながら、吞みに来いといふのは、ずいぶん失敬なはなしだ」と応じ、「今日の田植に手伝ひさせる魂胆」「恩に着せておいて稼がせやう」ともくろんでいると憶測して、「おれにはおれの仕事がある」とつぶやねてしまえば、和解できるものもできない。

賢治はあまりにも禁欲的であり潔癖であった。妥協を許さない法華行者であった。「隈」や「秘事念仏の大師匠」を決して許すことができなかったのである。だから、「憎むべき『隈』弁当を食ふ」「秘事念仏の大師匠」の[一][二]から伝わってくる隠し念仏の人達との底の深い確執は、あるいは賢治の一人よがりであったかもしれないし、どすぐろい対立意識が解けなかったとしたら、その責め的一端は賢治も負うべきであったろう。羅須地人協会失敗の悲劇を筆者はここに感じるのである。

## おわりに

賢治は死の1カ月前の昭和8年8月15日に「文語詩稿五十篇」、同じく8月22日に「文語詩稿一百篇」(実際には百一編)の推敲を終え、定稿としている。合計151篇の推敲と清書は、並外れた気力の充実ぶりを伺わせるが、すさまじいまでの執念でめざした文語定型詩化の意味をどう理解すれば賢治の心に近づくことができるのか、筆者は戸惑う。口語詩から文語詩に移った詩人は多いが、「文語詩双四聯に関する考察」といった詩法メモ<sup>36)</sup>を残し、厳格に文語定型詩化を行った詩人は稀有だからである。

賢治の文語詩の評価は未だ定まっていない。また、その内容が自分の過去の経験だけでなく、他者のものであったり、フィクショナルなものであったりすることに注意する必要があるともいう<sup>37)</sup>。しかし、筆者は文学としての結実度よりも、死の床で到達した賢治の信仰の在り様に注目したい。それは、両親や弟妹に遺言をしたためた昭和6年9月の東京での発熱直後から書き始めた「雨ニモマケズ手帳」にも共通する。端

的に言えば、賢治の後半生を貫いた熱烈な法華経信仰にかいまみられる、幼児期の体験を含めて、花巻周辺の伝統的な習俗の中に育まれた庶民信仰との葛藤なのである。

こうした課題の本格的な検討は別な機会に譲るが、今一度、口語詩「憎むべき『隈』弁当を食ふ」と文語詩「秘事念仏の大師匠[一]」で、この問題を補捉しておきたい。

口語詩の冒頭の「きらきら光る川に臨んで/ひとりて弁当を食ってゐるのは/まさしくあいつ「隈」である。/おれがひとりて移ってから/林の中から幽霊が出ると云ったり/毎晩女が来るといったり/町の方まで云ひふらした/あの憎むべき「隈」である」という激しい憎悪は、死の床で推敲した文語詩では消し去られているのである。

もちろん、その憎悪の念も既に口語詩の中で、「第三 やつはもういい加減腹いせをして/憎悪の念が稀薄である/そこでこっちもかあいさうなので/避けてやらうと思ふけれども/するとこんどはおれが逃げたと向ふが思ふ/ここにおいてかおれはどうにも/今日は勝つより仕方ない/(中略)/然るにかうきっぱりと勝つてしまふと/あとが青黒くてどうにもいけない/とは云ふものの別段おれは/何をしたという訳ではない/向ふで勝手<sup>(ママ)</sup>で播いたのを/向ふで勝手に刈ったのだ」と、ある程度、解決をつけていたのであるから、文語定型詩化の過程で昇華したとしても不思議ではない。しかし、それでもなお、文語詩「秘事念仏の大師匠[二]」には、「秘事念仏」に対する屈折した思いが払拭せず残されていた。死の床で反芻し葛藤し愛憎した庶民信仰へのこだわりがここにも一つ窺えるのである。

## (註)

- 1) 堀尾青史著『年譜宮沢賢治伝』(中央文庫)中央公論社、1991年、463頁。
- 2) 宗教学ではしばしば「回心」(conversion)という宗教現象が問題となる。回心は宗教的な心の目覚めであり、信仰体制の形成に重要な契機をなす現象であるから、宗教心理学は回心の研究から始まったといっても良いほどであった(岸

本英夫著『宗教学』大明堂、1961年、66頁）。ウィリアム・ジェイムズ（William James）は宗教的人間の類型化を試みて、現世肯定的な「一度生まれ型」（once-born）と未来志向の「二度生まれ型」（twice-born）とに分類した。前者は「健全な心の人」であり、楽天的に自力で問題解決に努力するタイプであるのに対して、後者は「病める魂の人」であり、人生の失敗・挫折・罪悪などの根源を自らの内に求め、他力的な救済を仰ぐタイプとしている。（『宗教経験の諸相』、原題 The Varieties of Religious Experience、1901-02、梶田啓三郎訳岩波文庫本）。

筆者は岸本門下の戸田義雄博士（元国学院大学教授）に師事し、修士論文「日本宗教心理史の研究—聖徳太子の信仰系譜を中心として」では、親鸞と実朝の回心（変革体験）を主テーマとして指導を仰いだ。師から繰り返し学んだことは、宗教現象の研究に不可欠な日本人の宗教意識や感性であった（戸田義雄著『宗教の世界』大明堂、1975年。同『日本の感性』日本教文社、1974年）。盛岡大学に奉職した1992年の6月にお目にかかったとき、聖徳太子研究の持続と宮沢賢治における宗教学的的研究を強く勧められた。賢治の回心問題は本格的な研究がないし、日本人の宗教意識を考える上で賢治は極めて重要な位置を占める文学者だからである。したがって、筆者の問題意識や研究スタンスは、師のお心とは少なからず外れてはいようが、その教えに添おうとするものである。師の学恩に深く感謝申し上げておきたい。

- 3) 宮沢賢治と庶民信仰に関して筆者は、(1) 岩手日報「学芸さろん」欄に「宮沢賢治と土俗信仰」と題し、1992年8月3日・10日・24日・31日・9月7日の5回連載を行い、(2) 盛岡大学日本文学会で「宮沢賢治の文学と信仰—固有信仰との葛藤をめぐって—」と題し、1993年5月22日に講演したことがある。近々、論文にまとめて発表する予定である。「宮沢賢治の文学と信仰—固有信仰との葛藤をめぐって—」『東北文学の世界』第2号、盛岡大学文学部日本文学科、1994年3月刊行予定
- 4) 「文語詩稿一百篇」『校本宮沢賢治全集』（以下、略して『校本全集』とする）第5巻、筑摩書房、1974年、138頁。
- 5) 藤原嘉藤治稿「語註」『宮沢賢治全集』第2巻、十字屋書店、1940年、語註32頁。
- 6) 拙稿「まいりの仏（十月仏）の祭祀」前編・後編、『岩手県立博物館研究報告』第4号・5号、1985年・1986年。及び同「仏の月の伝承と十月

仏—まいりの仏再考—」『東北民俗』第21輯、東北民俗の会、1987年。

- 7) 「春と修羅 詩稿補遺」前掲『校本全集』第4巻、1976年、213～215頁。
- 8) 「文語詩稿五十篇」前掲『校本全集』第5巻、44頁。
- 9) 「春と修羅 第三集」前掲『校本全集』第4巻、80頁。
- 10) 高橋梵仙著『かくし念仏考 第一』日本学術振興会、1956年、340頁。
- 11) 「春と修羅 詩稿補遺」前掲『校本全集』第4巻、616頁。
- 12) 遠野地方も隠し念仏が盛んだった地で、佐々木喜善に「奥州地方に於ける特種信仰—隠念仏に就いて—」（『史学』第10巻第2号、1931年）がある。佐々木喜善（1886-1933）は、1928年・1930年・1932年と賢治を訪問しており、賢治に民俗学的な関心を呼び起こさせた。童話「ざしき童子のはなし」は、喜善の『奥州サンキワラシの話』（1920年）の影響を受けて書いたものといわれる。
- 13) 「典型」『高村光太郎全集』第3巻、筑摩書房、1958年、336・337頁。
- 14) 多田等観（1890-1967）は、秋田市の浄土真宗本願寺派の寺院に生まれたチベット仏教学者で、大正2年にチベット入りし、ラサで10年間僧院生活を送った。帰国に際してはデルゲ版チベット大蔵経をはじめ2万4千部余の貴重なチベット仏教研究文献を持ち帰った。また、同時に将来した多数の仏像・仏画・仏具などは、花巻市南川原町の光徳寺境内の蔵修館に収蔵されている。
- 15) 光徳寺は花巻市南川原町にある浄土真宗本願寺派寺院。開基は信覚法師で、親鸞二十四輩の一人・是信坊に従い、奥州に下向して和賀の一つ柏に師とともに居住して布教活動をし、弘安元年（1278）稗貫郡太田村折居に草庵を結んだのが始まり。後に、花巻城代北松斎の懇請で現在地に移転したという。暁鳥敏は、明治39年7月14日から18日にかけて、5回にわたって『歎異抄』の講義を光徳寺で行い、8月には大沢温泉での「第9回夏期仏教講習会」の講師を勤め、その9日に撮った写真には、10歳の賢治も写っている。なお、現在でも「十七日講」の見真大師碑供養には光徳寺住職が招かれている。
- 16) 佐藤隆房著『高村光太郎山居七年』高村記念館、1962年、76頁。
- 17) 同書、162頁。
- 18) 東和町史編纂委員会編『東和町史』民俗編、東

- 和町, 1979年, 371・372頁。
- 19) 大矢邦宣編著『和賀町の石造文化財』和賀町教育委員会, 1989年, 74頁。
- 20) 光太郎と村人との親交は、前書『高村光太郎山居七年』に詳しい。
- 21) 隠し念仏については、拙著『隠し念仏』東京堂出版, 1989年を参照。また、各派の沿革は前掲『かくし念仏考 第一』に詳しい。
- 22) 前掲『かくし念仏考 第一』50頁。
- 23) 前掲拙著『隠し念仏』第1章の「隠し念仏名譽毀損事件」の項参照。
- 24) 佐藤勝治稿「賢治と私の生家のある花巻町豊沢町の思い出(一)」『賢治文学のよろこび』第1集, 寂光林, 1987年, 45頁。
- 25) 前掲拙著『隠し念仏』第3章「隠し念仏のオトリアゲ」の項参照。
- 26) 栗原敦著『宮沢賢治—透明な軌道の上から』新宿書房, 1992年, 8~51頁。
- 27) 宮沢清六稿「幼児の追憶」『宮沢賢治全集』月報第11号, 筑摩書房, 1957年。
- 28) 内藤正敏著『聞き書き遠野物語』新人物往来社, 1978年, 135頁。
- 29) 小倉豊文著『宮沢賢治聲聞縁覚録』文泉堂出版, 1980年, 138・139頁。
- 30) 阿伊染徳美著『わがかくし念仏』思想の科学社, 1977年。27・28頁に次のように記されている。  
オレは神童だった。いや、仏童(?)といった方がいいのかな。とにかく、村のバアさん連中が、オレをおがみに来たんだ、おさい銭あげてね。あれは弟が生まれる前だから、満で二歳と何か月だと思う。そのちっちゃいわらし子のオレが、蓮如上人の御文章をすらすらと暗誦したわけだ。コタツヤグラの上ですわって、  
「聖人一流ノ御勸化の趣ギハ、信心ヲ以テ本トセラレ候。ソノ故ハ、モロモロノ雜行ヲナゲステデー心ニ弥陀ニ帰命スレバ不可思議ノ願力ドシテ仏ノカタヨリ往生ハ治定セシメタマウ……云々」  
そんなに長いものではないけれど、なにしろ二つだからみんな驚いて、拜みに来た。(中略)  
オレは蓮如のこの御文章を、ひいバアさんのハギからおそわった。毎朝、毎朝、徹底的におしえられた。バアさん自身、字は読めないんだから、自分の覚えていることに命をかけて、口うつしに言わせるんだ。前に書いた「へへのへら骨……」を覚えてくれたのもこのハギバアさんで、おれは実にたくさんのことを学んだ。ハギバアさんが死んだとき、オレは中学二年だったが、あんまりいたましくって、バアさんの遺骸とならんで蒲団にくるまって二晩ねた。
- 31) 内田朝男著『私の宮沢賢治』農山漁村文化協会 1981年, 145頁。
- 32) 森荘巳池著『宮沢賢治の肖像』津軽書房, 1974年, 285~289頁。
- 33) 「春と修羅 詩稿補遺」前掲『校本全集』第4巻, 262頁。
- 34) 同書, 660・661頁。
- 35) 「詩ノート」前掲『校本全集』第6巻, 1976年, 205頁。
- 36) 「詩法メモ」前掲『校本全集』第12巻(上), 1975年, 617頁。
- 37) 山内修編著『年表作家読本宮沢賢治』河出書房新社, 1989年, 205頁。